

(2) 全数把握対象感染症(一類～五類感染症の一部、新型インフルエンザ等感染症)の概況

(表-2-1～6)

ア 一類感染症

対象7感染症の報告は、なかった。

イ 二類感染症

対象5感染症のうち報告があったのは、結核のみであった。

(ア) 結核

464 例の報告があり、肺結核 240 例、その他 224 例であった。性別は、男性 241 例、女性 223 例、年齢は、75 歳以上が 170 例 (36.6%) で、肺結核では 75 歳以上が、129 例 (53.8%) であった。推定感染地域は、国内 451 例、海外 10 例 (中国 6 例、フィリピン 3 例、タイ 1 例)、国内又は海外 (ベトナム、中国) 2 例、不明 1 例で、推定感染経路は、飛沫・飛沫核 418 例、再燃 21 例、不明 25 例であった。

ウ 三類感染症

対象5感染症のうち報告があったのは、細菌性赤痢、腸管出血性大腸菌感染症の2感染症で、計 36 例の報告があった。

(ア) 細菌性赤痢

ソネネの報告が2例あり、性別は、男性 1 例、女性 1 例、年齢階級別は、ともに 20 歳代、推定感染地域は、国内 1 例、海外 (インド・フィリピン) 1 例、推定感染経路は、経口 1 例、接触 1 例であった。平成 20 年以降年間累積報告数は、1～2 例となっている。

(イ) 腸管出血性大腸菌感染症

34 例の報告があり、平成 11 年 4 月以降では平成 11 年 (26 例)、平成 12 年 (33 例) に次いで少なく、平成 22 年と同数であった。

詳細は、[患者情報 1](#)「(1)ア 平成 23 年 腸管出血性大腸菌感染症のまとめ」を参照。

エ 四類感染症

平成 23 年 2 月 1 日からチクングニア熱が追加され、対象は、42 感染症となった。そのうち報告があったのは、A型肝炎、オウム病、デング熱、日本紅斑熱、マラリア、レジオネラ症の6感染症で計 18 例の報告があった。

(ア) A型肝炎

1 例の報告があり、性別は、男性、年齢階級別は、20 歳代、推定感染地域は、海外 (中国)、推定感染経路は、経口であった。

(イ) オウム病

1 例の報告があり、性別は、女性、年齢階級別は、60 歳代、推定感染地域は、国内、推定感染経路は、媒介動物 (インコ) であった。

(ウ) デング熱

3 例の報告があり、デング熱 2 例、デング出血熱 1 例であった。デング出血熱は、感染症法が施行された平成 11 年以降初めての報告であった。性別は、男性 2 例、女性 1 例、年齢階

級別は、20 歳代 2 例、30 歳代 1 例、推定感染地域は、すべて海外（インド 2 例、モルディブ 1 例）、推定感染経路は、すべて蚊であった。

（エ）日本紅斑熱

1 例の報告があり、性別は、女性、年齢階級別は、30 歳代、推定感染地域は、国内（京都府外）、推定感染経路は、媒介動物であった。

（オ）マラリア

熱帯熱の報告が、1 例あり、性別は、男性、年齢階級別は、20 歳代、推定感染地域は、海外（インドネシア）、推定感染経路は、蚊であった。

（カ） レジオネラ症

11 例の報告があり、肺炎型 10 例、ポンティアック型 1 例であった。性別は、男性 9 例、女性 2 例、年齢階級別は、30 歳代 1 例、40 歳代 1 例、50 歳代 1 例、60 歳代 3 例、70 歳代 3 例、90 歳代 2 例、推定感染地域は、国内 10 例、海外（タイ）1 例、推定感染経路は、水系 5 例、塵埃 1 例、不明 5 例であった。

オ 五類感染症

対象 16 感染症のうち報告があったのは、アメーバ赤痢、ウイルス性肝炎、急性脳炎、クロイツフェルト・ヤコブ病、劇症型溶血性レンサ球菌感染症、後天性免疫不全症候群、ジアルジア症、梅毒、バンコマイシン耐性腸球菌感染症の 9 感染症で、計 63 例の報告があった。

（ア） アメーバ赤痢

21 例の報告があり、腸管アメーバ症 17 例、腸管外アメーバ症 2 例、腸管及び腸管外アメーバ症 2 例であった。性別は、男性 20 例、女性 1 例、年齢階級別は、30 歳代～70 歳代、推定感染地域は、国内 17 例、海外 4 例（アメリカ（グアム）インドネシア、大韓民国、タイ・中国各 1 例）、推定感染経路は、経口 5 例、性行為 9 例（同性間 4 例、異性間 5 例）、不明 7 例であった。

（イ） ウイルス性肝炎

4 例の報告があり、B 型肝炎 3 例、その他（サイトメガロウイルス）1 例であった。性別は、すべて男性、年齢階級別は、20 歳代 1 例、30 歳代 2 例、70 歳代 1 例、推定感染地域は、すべて国内、推定感染経路は、性行為 2 例（同性間 1 例、不明 1 例）、不明 2 例であった。

（ウ） 急性脳炎

3 例の報告があり、性別は、すべて男性、年齢階級別は、10 歳未満 1 例、30 歳代 1 例、40 歳代 1 例、推定感染地域は、すべて国内、推定感染経路は、飛沫・飛沫核 2 例、不明 1 例であった。病原体は、インフルエンザ B 型 1 例、ヘルペスウイルス 1 例、不明 1 例であった。

（エ） クロイツフェルト・ヤコブ病

4 例の報告があり、孤発性 3 例、感染性 1 例であった。性別は、男性 3 例、女性 1 例、年齢階級別は、40 歳代 1 例、60 歳代 1 例、70 歳代 2 例、推定感染地域は、国内 1 例、不明 3 例、推定感染経路は、ヒト乾燥硬膜 1 例、不明 3 例であった。

(オ) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

4例の報告があり、性別は、男性 3例、女性 1例、年齢階級別は、30歳代 1例、60歳代 1例、70歳代 1例、80歳代 1例、推定感染地域は、すべて国内、推定感染経路は、飛沫・飛沫核 2例、創傷 2例であった。

(カ) 後天性免疫不全症候群

14例の報告があり、無症候性キャリア 9例、AIDS 5例であった。性別は、すべて男性、年齢階級別は、無症候性キャリアは 20歳代 3例、30歳代 5例、40歳代 1例、AIDSは 30歳代 4例、50歳代 1例であった。推定感染地域は、国内 10例、海外（タイ）1例、不明 3例、推定感染経路は、性行為 12例（同性間 5例、異性間 6例、不明 1例）、不明 2例であった。

(キ) ジアルジア症

2例の報告があり、性別は、男性 1例、女性 1例、年齢階級別は、30歳代 1例、40歳代 1例、推定感染地域は、国内 1例、海外（インド）1例、推定感染経路は、経口 1例、性行為（異性間）1例であった。

(ク) 梅毒

7例の報告があり、早期顕症Ⅱ期 6例、無症候 1例であった。性別は、すべて男性、年齢階級別は、20歳代 2例、30歳代 4例、60歳代 1例、推定感染地域は、国内 6例、海外（アメリカ）1例、推定感染経路は、性行為 4例（同性間 3例、不明 1例）、不明 3例であった。

(ケ) バンコマイシン耐性腸球菌感染症

3例の報告があり、性別は、すべて女性、年齢階級別は、70歳代 1例、80歳代 2例、推定感染地域は、すべて国内、推定感染経路は、接触 2例、不明 1例であった。

カ 新型インフルエンザ等感染症

対象2感染症のうち新型インフルエンザとして新型インフルエンザ（A／H1N1）のみ発生した。当該感染症は、平成21年7月24日以降定点把握対象のインフルエンザとして集計されていたが、平成23年4月1日からインフルエンザ（H1N1）2009に名称が変更され、新型インフルエンザから季節性インフルエンザへ移行している。

(3) 定点把握対象五類感染症の概況

ア 患者定点の変遷について(表-3)

定点把握対象五類感染症の定点数は、インフルエンザ定点 67、小児科定点 40、眼科定点 10、性感染症定点 13、基幹定点 1 であったが、平成 23 年 9 月 5 日（第 36 週）からインフルエンザ定点 66、小児科定点 39 に減少した。

定点数の推移

年次\定点の種別	インフルエンザ*	小児科	眼科	性感染症	基幹
平成11年	68	41	10	13	1
平成12年	68	41	10	13	1
平成13年	68	41	10	13	1
平成14年	68	41	10	13	1
平成15年	68	41	10	13	1
平成16年	68	41	10	13	1
平成17年	68	41	10	13	1
平成18年	68	41	10	13	1
平成19年	68	41	10	13	1
平成20年	68	41	10	13	1
平成21年	68	41	10	13	1
平成22年**	68(67)	41(40)	10	13	1
平成23年***	67(66)	40(39)	10	13	1

* インフルエンザ定点は感染症法施行時(平成11年4月)に新設された。それまでのインフルエンザは、インフルエンザ様疾患として小児科定点から報告されていた。

** () 内は、平成 22 年 11 月 1 日(第 44 週)以降の定点数

*** () 内は、平成 23 年 9 月 5 日(第 36 週)以降の定点数

インフルエンザ定点は、インフルエンザの発生状況を全年齢階級で定量的に把握し、発生予防及びまん延防止に役立てるため感染症法施行時(平成 11 年 4 月)に新たに設置された。小児科定点 41 と内科定点 27 を合わせた 68 定点であったが、平成 22 年 11 月 1 日（第 44 週）から左京区の 1 定点が減少し 67 定点となり、平成 23 年 9 月 5 日（第 36 週）から右京区の 1 定点が減少し 66 定点となった。行政区別の定点は伏見区が 11 定点と最も多く、次いで右京区が 8 定点（9 月 5 日（第 36 週）から 7 定点）、北区、山科区、西京区が各 7 定点、左京区が 6 定点、上京区、中京区、南区が各 5 定点、東山区、下京区が各 3 定点である。

小児科定点は、昭和 57 年 4 月の感染症発生動向調査事業の開始時に 48 定点でスタートしたが、その後行政区の人口、特に小児人口を考慮して定点数とその配置の変更を行ってきた。昭和 62 年には 46 定点、平成 5 年には 43 定点、平成 6 年には 42 定点に変更されたが、平成 7 年には定点数の少ない区を中心に 7 定点増設され 49 定点となった。平成 11 年 4 月から感染症法の施行に伴い、41 定点となった。平成 22 年 11 月 1 日（第 44 週）から左京区の 1 定点が減少し 40 定点となり、平成 23 年 9 月 5 日（第 36 週）から右京区の 1 定点が減少し 39 定点となった。行政区別の定点は、伏見区が 7 定点と最も多く、次いで右京区が 5 定点（9 月 5 日（第 36 週）から 4 定点）、北区、山科区、西京区が各 4 定点、上京区、左京区、中京区、南区が各 3 定点、東山区、下京区が各 2 定点である。

眼科定点は、昭和 57 年 4 月から平成 11 年 3 月まで、上京区、中京区、伏見区に各 1 定点ずつ計 3 定点であったが、平成 11 年 4 月から感染症法の施行に伴い 10 定点となった。行政区別の定点は、中京区と伏見区が各 2 定点、北区、上京区、左京区、山科区、右京区、西京区が各 1 定点である。

性感染症定点は、昭和 62 年に 10 定点で開始され、平成 2 年には 9 定点、平成 7 年には 12 定点、平成 11 年 4 月から感染症法の施行に伴い、13 定点(産婦人科 7 定点、泌尿器科・皮膚科 6 定点)となった。行政区別の定点は、中京区と伏見区が各 2 定点、その他の区が各 1 定点である。ただし、性器クラミジア感染症、淋菌感染症については一部の行政区でデータの不備があった。このため性器クラミジア感染症については、平成 11 年 4 月から平成 14 年 12 月までは 2 定点(東山区、下京区)を除く 11 定点のデータを、平成 15 年 1 月から平成 16 年 12 月までは 1 定点(下京区)を除く 12 定点のデータを使用した。また、淋菌感染症については、平成 11 年 4 月から平成 16 年 12 月までは 1 定点(下京区)を除く 12 定点のデータを使用した。

基幹定点は、平成 11 年 3 月までの病院定点に相当するものであるが、平成 11 年 4 月から感染症法の施行に伴い規定に合わせて見直され中京区の 1 定点となった。

行政区別定点数（平成23年）

行政区\定点	インフルエンザ	小児科	眼科	性感染症	基幹
北	7	4	1	1	—
上京	5	3	1	1	—
左京	6	3	1	1	—
中京	5	3	2	2	1
東山	3	2	—	1	—
山科	7	4	1	1	—
下京	3	2	—	1	—
南	5	3	—	1	—
右京*	8(7)	5(4)	1	1	—
伏見	11	7	2	2	—
西京	7	4	1	1	—
合計*	67(66)	41(40)	10	13	1

*（ ）内は、平成 23 年 9 月 5 日(第 36 週)以降の定点数

イ 年間報告数、定点当たり報告数の推移(表-4-1～5-2, 図-1～2, 図5)

(ア) インフルエンザ定点

インフルエンザ定点からの年間報告数は、10,191 例であった。平成 16 年以降ではインフルエンザ(H1N1)2009 の流行した平成 21 年、平成 17 年、平成 19 年に次いで多かった。

インフルエンザについての詳細は、[患者情報 1](#)「(1) イ 平成 23 年 インフルエンザのまとめ」を参照。

(イ) 小児科定点

小児科定点からの 11 感染症の年間総報告数は、20,748 例であり、平成 16 年以降では平成 21 年、平成 19 年、平成 20 年に次いで少なかった。上位 5 感染症は、感染性胃腸炎(10,243 例)、手足口病(3,469 例)、水痘(1,771 例)、A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎(1,418 例)、ヘルパンギーナ(1,092 例)の順であり、上位 5 感染症の報告数の合計は、17,993 例で年間総報告数の 86.7%

を占め、最も多い感染性胃腸炎は、49.4%を占めていた。

小児科定点把握対象感染症の定点当たり報告数をみると、過去5年間(平成18年から平成22年まで)の平均値(過去5年平均値)より多い感染症は、11感染症中6感染症であった。過去5年平均値との比は、手足口病が3.52倍と最も高く、ピーク時の定点当たり報告数(12.68)は、昭和57年に感染症発生動向調査が開始されて以降の最高値であった。伝染性紅斑(1.65倍)は、前年に引き続き流行年となった。

小児科定点把握対象感染症の報告数(報告数の降順)

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	割合(%)	定点当たり報告数の 過去5年平均値との比 ()内は前年比
1 感染性胃腸炎	10,243	257.45	49.4	0.88 (0.79)
2 手足口病	3,469	87.19	16.7	3.52 (2.21)
3 水痘	1,771	44.67	8.5	0.88 (0.76)
4 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,418	35.69	6.8	1.02 (1.10)
5 ヘルパンギーナ	1,092	27.35	5.3	1.32 (1.32)
小計(1～5)	17,993	452.36	86.7	1.07 (0.95)
6 突発性発しん	785	19.79	3.8	0.99 (1.02)
7 伝染性紅斑	685	17.19	3.3	1.65 (1.41)
8 流行性耳下腺炎	611	15.38	2.9	0.65 (0.34)
9 咽頭結膜熱	352	8.83	1.7	1.07 (1.95)
10 RSウイルス感染症	295	7.49	1.4	1.50 (0.64)
11 百日咳	27	0.68	0.1	0.77 (0.90)
合計	20,748	521.71	100	— (0.92)

小児科定点把握対象感染症の報告数(過去5年平均値との比の降順)

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数の 過去5年平均値との比 ()内は前年比
1 手足口病	3,469	87.19	3.52 (2.21)
2 伝染性紅斑	685	17.19	1.65 (1.41)
3 RSウイルス感染症	295	7.49	1.50 (0.64)
4 ヘルパンギーナ	1,092	27.35	1.32 (1.32)
5 咽頭結膜熱	352	8.83	1.07 (1.95)
6 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,418	35.69	1.02 (1.10)
7 突発性発しん	785	19.79	0.99 (1.02)
8 感染性胃腸炎	10,243	257.45	0.88 (0.79)
9 水痘	1,771	44.67	0.88 (0.76)
10 百日咳	27	0.68	0.77 (0.90)
11 流行性耳下腺炎	611	15.38	0.65 (0.34)

(ウ) 眼科定点

眼科定点からの2感染症の年間総報告数は、303例であった。

定点当たり報告数は、流行性角結膜炎は29.30で、前年に比べやや増加し、急性出血性結膜炎は1.00で、前年に比べ増加した。

眼科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と 過去5年平均値との比 ()内は前年比
1 流行性角結膜炎	293	29.30	1.05 (1.11)
2 急性出血性結膜炎	10	1.00	3.33 (10.00)
合計	303	30.30	1.08 (1.15)

(エ) 性感染症定点

性感染症定点からの4感染症の年間総報告数は、546例でありその内訳は、性器クラミジア感染症 314例、性器ヘルペスウイルス感染症 141例、尖圭コンジローマ 45例、淋菌感染症 46例であった。前年比は、性器クラミジア感染症 1.31、性器ヘルペスウイルス感染症 1.18、尖圭コンジローマ 1.32、淋菌感染症 1.21であり、すべて前年よりもやや増加した。

性感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と 過去5年平均値との比 ()内は前年比
1 性器クラミジア感染症	314	24.15	1.36 (1.31)
2 性器ヘルペスウイルス感染症	141	10.85	1.14 (1.18)
3 尖圭コンジローマ	45	3.46	1.17 (1.32)
4 淋菌感染症	46	3.54	1.24 (1.21)
合計	546	42.00	1.27 (1.26)

(オ) 基幹定点

平成23年2月1日から薬剤耐性アシネトバクター感染症が、追加され、基幹定点対象感染症は、8感染症となった。そのうち報告のあったのは、2感染症（マイコプラズマ肺炎、無菌性髄膜炎）で、年間総報告数は5例（マイコプラズマ肺炎 3例、無菌性髄膜炎 2例）であった。

ウ 月別の報告状況（表-6-1～表-10、図-3～4）

感染症発生動向調査における平成23年の報告週対応表は、〈表-1〉に示すとおりである。また、週単位で報告される感染症の月別集計は、この表に基づいて行っている。

インフルエンザ定点におけるインフルエンザの月別報告数は、1月（4,438例）、2月（2,449例）、3月（1,542例）の順となった。

小児科定点における対象感染症の月別報告数は、7月（3,022例）、1月（2,210例）、6月（1,970例）の順となった。

例)の順で多く、報告数が少なかったのは、9月(813例)、11月(987例)であった。

感染症別報告数の月別1位は、1月～6月、9月～12月は感染性胃腸炎で、2月～4月は70%以上を占めた。7月、8月は手足口病であった。月別2位は、6月、9月～11月は手足口病、1月、3月、12月は水痘、2月、4月、5月はA群溶血性レンサ球菌咽頭炎、7月はヘルパンギーナ、8月は感染性胃腸炎であった。月別3位は、2月、4月、5月、10月、11月は水痘、1月、3月、12月はA群溶血性レンサ球菌咽頭炎、6月、8月はヘルパンギーナ、7月は感染性胃腸炎、9月は突発性発しんであった。

眼科定点及び性感染症定点における対象感染症の月別の報告数は、〈表-6-2〉に示すとおりである。

エ 年齢階級別の報告状況(表-11-1～14-2, 図-6)

インフルエンザ定点における年齢階級別割合は、0～9歳が4,625例で全体の45.4%を占めた。

小児科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、1歳が最も多く18.7%を占め、以下2歳13.5%、3歳10.9%の順であり4歳以下が総報告数の62.8%を占めた。

小児科定点における年齢階級別の感染症別報告数は、全年齢階級とも感染性胃腸炎が1位であり、2位は、0～5箇月ではRSウイルス感染症、6～11箇月では突発性発しん、1～5歳では手足口病、6歳以上ではA群溶血性レンサ球菌咽頭炎であった。

眼科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、30～39歳が22.8%と最も高く、次いで0～9歳及び20～29歳が各15.8%であった。

性感染症定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、20～24歳が24.9%、25～29歳が22.0%、30～34歳及び15～19歳が各13.4%、35～39歳が9.0%の順であり15～39歳が82.6%を占めた。

オ 行政区別の報告状況

行政区別の報告数、行政区別の定点当たり報告数、感染症別の行政区別割合及び行政区別の感染症別割合は、〈表-15-1～18-2〉に示すとおりである。